様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：13901
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2011
課題番号：21720139
研究課題名（和文）
ラオス北部における危機言語および少数言語の研究
研究課題名（英文）
A study of endangered and minotiry languages spoken in northern Laos
研究代表者
加藤　高志（KATO Takashi）
名古屋大学・大学院国際開発研究科・准教授
研究者番号：20377766

研究成果の概要（和文）：ラオス北部には、話者が 1 万人に満たない、消滅の危機に瀕した言語がたくさんある。しかし、そのような言語のほとんどは、先行研究がまったく、あるいはほとんどなかった。本研究は、消滅する前にそのような言語を記録しておくことを目的としている。本研究では、人口 514 人のテーン語、人口 649 人のウードゥー（イドゥッフ）語、話者数約 100 人のコンサート（スマ）語などを含む、約 20 の言語のデータを収集した。

研究成果の概要（英文）：In northern Laos there are many endangered languages with less than 10,000 speakers. However, most of such languages had had no or few previous descriptions when this study started. The purpose of this study is to document such languages. This study has collected data of about 20 languages, including Then (514 people), Iduh (649 people), Kongsat (Suma, about 100 speakers).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学、言語学
キーワード：危機・少数言語、ラオス、チベット・ビルマ、モン・クメール

１．研究開始当初の背景

1998 年時点において、ラオスで話されている言語は、ラーオ語、フモン語、クム語、プーノーイ語など少数の例外を除き、先行研究と呼べるものがほとんどないか、まったくない言語ばかりであった。それは、ラオスの言語研究におけるラオス国内の人的資源（つまり言語学者）がほとんどないこと、外国人が調査許可を得るのに多大な困難（手続きの煩雑さ、人脈および金銭が必要なことなど）が伴うこと、が主な理由であった。特にラオス北部の場合は、山岳地帯であり交通インフラが整備されておらずアクセスが困難である、という理由もあった。

ここで 1998 年に転機が訪れた。私も参加した、東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所の新谷忠彦教授主導の共同研究プロジェクト「シャン文化圏に関する総合的研究」がこの困難な状況を打開し、1998 年、1999 年の 2 回にわたりラオス北部のポンサーリー県ポンサーリー郡、ブンヌア郡、ブンタイ郡において言語調査を行った。これらの調査では、タイ系の言語 4 つ、漢語系の言語 1 つ、モン・クメール系の言語 3 つ、チベット・ビルマ系の言語 17 つにおいて、303 項目の語彙調査が行われた。その成果としては、

Kingsada and Shintani (eds.) (1999)、Shintani, Kosaka and Kato (2001)などがある。これらの研究によって初めて、ポンサーリー県については、言語の概況がかなり分るようになった。

この共同研究プロジェクト終了後も、私は単独でラオスのチベット・ビルマ系の言語の調査・研究を行ってきた。2003 年には、国際シナ・チベット言語学会において、それまでの調査・研究の中間報告として、ラオスのチベット・ビルマ系の言語の概況について発表した（Kato (2003)）。また、2005 年度から 2007 年度には文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)「タイおよびラオスにおけるロロ諸語の研究」において、前述のプロジェクトの時点では橋が崩落していたために行くことができなかったポンサーリー県ニョートウー郡を中心に、ロロ語、ハニ語、クー語など、今までまったく先行研究がなかった 7 言語を含む、10 ほどのチベット・ビルマ系の言語の調査・研究を行ってきた。その成果の 1 部分として、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から、前述の今までまったく先行研究がなかった 7 言語を含む 10 言語の音韻分析と語彙が収録された語彙集を出版した（Kato (2008)）。

参考文献

Kato, Takashi (2003) Tibeto-Burman languages of Lao P.D.R.: in a new ethnic classification. 36th international conference on Sino-Tibetan languages and linguistics.

Kato, Takashi (2008) *Linguistic survey of Tibeto-Burman languages in Lao P.D.R.* Tokyo: Research Tnstitute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Kingsada, Thongphet and Tadahiko Shintani (eds.) (1999) *Basic vocabularies of the languages spoken in Phongxaly, Lao P.D.R.* Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

Shintani, Tadahiko, Ryuichi Kosaka and Takashi Kato (2001) *Linguistic survey of Phongxaly, Lao P.D.R.* Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

２．研究の目的

本研究ではこれらの研究を踏まえて、チベット・ビルマ系の言語に関してはかなり言語の概況が分ってきたポンサーリー県のほかに、まだ言語状況がよく分っていないルアンナムター県、ウドムサイ県、ボーケーオ県、フアパン県、シエンクアーン県、ルアンパバーン県も対象地域に加える。また、チベット・ビルマ系の言語のみならず、モン・クメール系の言語も調査対象とする。この 2 系統の言語のうち、危機言語、少数言語と呼びうる言語について、語彙調査、文法調査を行う。

本研究では、すべてのチベット・ビルマ系の民族、および、ラオス北部に集中して居住する人口 1 万人未満のモン・クメール系の民族を対象とする。それは以下の民族である。

・チベット・ビルマ系：ハニ（848 人）、ロロ（1691 人）、シラ（2939 人）、ラフ（15238 人）、プーノーイ（37447 人）、アカ（90698 人）　カッコ内は 2005 年時の人口。

・モン・クメール系：テーン（514 人）、ウードゥー（649 人）、ビット（1964 人）、サームターオ（3533 人）、シンムーン（8565 人）　カッコ内は 2005 年時の人口。

これらの民族のうち、アカ族は比較的人口が多いが、ラオスのアカ族にはクー、パナ、ムトゥン、パラ、ルマ、ムチ、コンサート、プサンなどアカを自称しない多くの下位集団があり、アカを自称するアカ族の言語とはかなり異なった言語を話す。クー族を除いて、今あげた下位集団には公式の人口統計はないが（クー族は 1995 年時点で 1639 人）、いずれも 1 万人に満たないと推測され、危機言語あるいは少数言語であると言えるため、調査対象とする。

また、プーノーイ族も比較的人口が多いが、この民族もラーオセーン、プーニョートなどのいくつかの下位集団からなり、言語的にも複数の言語からなるとみなせる。アカ族の下位集団と同様、今あげた 2 つの下位集団にも公式の人口統計はないが、いずれも 1 万人に満たないと推測され、危機言語あるいは少数言語であると言えるため、調査対象とする。

なお、系統的には、これらのチベット・ビルマ系の民族の言語はすべてロロ・ビルマ語群ロロ諸語に属する。これに対して、これらのモン・クメール系の言語はクム語派（テーン語、ウードゥー語、ビット語、シンムーン語）とパラウン語派（サームターオ語）に分かれる。

３．研究の方法

本研究では、4 種類の語彙調査票と 1 種類の文法調査票を用いて、言語調査を行った。まったくデータがなかった言語は、Kingsada and Shintani (1999)で用いられた 303 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。すでに 303 項目の語彙調査が終わっている言語のうち、チベット・ビルマ系の言語については、Bradley (1979) がロロ諸語の比較研究のために作成した 866 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、モン・クメール系の言語については Diffloth (1980) が作成した 604 項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。チベット・ビルマ系

の言語については、私が作成した簡単な文法調査票を用いて文法調査も行った。すでに866項目の語彙調査が終わっているロロ語については黄（1992)で用いられている1822項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。

2009年度は、2009年7月および8月に29日間、2009年12月および20010年1月に17日間、2010年3月に23日間、合計69日間の言語調査を行った。調査地はポンサーリー県、ルアンナムター県、ウドムサイ県、シエンクアーン県、フアパン県、ボーケーオ県である。まったくデータがなかったアカ・チチョ語、アカ・ペン（ボチェ）語、クイ・スーン（ラフ）語、クイ・ルアン（ラフ）語、サームターオ語、サームターオ・ドーイ語、ウードゥー（イドゥッフ）語、シンムーン（クシーンムール）語については、303項目の語彙調査を行った。また、人口が26314人と比較的多いため、当初は調査対象として考えていなかったポーン族は、言語的に多様であることが分かり、急遽調査対象として加えることにした。ポーン族の下位集団のうち、ポーン・ピアット語、ポーン・ペーン語について、303項目の語彙調査を行った。ルアンナムター県のシラ語、プサン（パザ）語、プーニョート語、コンサート（スマ）語、パナ語、クー語、ラーオセーン語、ムチ（ワニュ）語、ムトゥン（モトゥ）語は866項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、ほとんどの言語において約9割の項目を収集した。また、一部の言語については文法調査も行った。ロロ語は、1822項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、約4割の項目を収集した。ビット語は604項目の語彙調査を行った。

2010年度は、2010年8月に27日間、2010年12月および20011年1月に19日間、2011年3月に20日間、合計66日間の言語調査を行った。調査地はポンサーリー県、ルアンナムター県、ウドムサイ県、シエンクアーン県、ボーケーオ県、ルアンパバーン県である。アカ・ペン（ボチェ）語については、収集済みの303項目の語彙のチェックを行った。ルアンナムター県のシラ語、プサン（パザ）語、コンサート（スマ）語、パナ語、クー語、ラーオセーン語、ムチ（ワニュ）語については、収集済みの866項目の語彙のチェックを行い、平均して約9割終了した。ハニ語、ルマ語、パラ語については866項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、それぞれ10割、約9割、約5割の項目を収集した。クー語については、かなりの方言差があるという情報を話者から得たため、未調査のいくつかの村落において303項目の語彙調査を行った。ロロ語は1822項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、約6割の項目を収集した。サームターオ語とウードゥー（イドゥッフ）語については、収集済みの303項目の語彙のチェックを行った。テーン語は303項目の語彙調査を行い、さらに、604項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、その約9割の項目を収集した。

2011年度は、2011年8月に24日間、2011年12月および20012年1月に20日間、合計44日間の言語調査を行った。調査地はポンサーリー県、ルアンナムター県、シエンクアーン県、フアパン県、ルアンパバーン県である。クー語については、数種の方言において、収集済みの303項目の語彙のチェックおよび追加の語彙調査を行った。ロロ語については、1822項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行い、約8割の項目を収集した。ラーオセーン語については、収集済みの866項目の語彙のチェックを行った。サームターオ語については、ルアンナムター県ナーレー郡の村で、未調査の方言の303項目の語彙調査を行った。ウードゥー語については、604項目からなる語彙調査票を用いて語彙調査を行った。テーン語については、収集済みの303項目の語彙と604項目の語彙のチェックを行った。サームターオ・ドーイ語、シンムーン（クシーンムール）語については、収集済みの303項目の語彙のチェックを行った。ビット語、ポーン・ピアット語、ポーン・ペーン語については、収集済みの303項目の語彙のチェックおよび追加の語彙調査を行った。まったくデータがなかったポーン・タプアン語、ポーン・プン語、ポーン・ラーン語については、303項目の語彙調査を行った。

参考文献

Bradley, David (1979) *Proto-Lololish*. London and Malmö: Curzon Press.

Diffloth, Gérald (1980) *The Wa languages*. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 5.2.

黄布凡（主編）（1992）『蔵緬語族語言詞彙』北京：中央民族学院出版社.

４．研究成果

本研究の最も重要な成果は、アカ・ペン（ボチェ）語、クイ・スーン（ラフ）語、クイ・ルアン（ラフ）語、サームターオ語、サームターオ・ドーイ語、ウードゥー（イドゥッフ）語、シンムーン（クシーンムール）語、ポーン語のような、いままでまったくデータがなかった言語のデータが得られ、それらの音韻に関する分析が進んだことである。また、今までのデータがあった言語についても、データの量と質が向上し、音韻に関する分析が進んだ。さらに、3533人と比較的人口が多い

サームターオ族の言語は、実は危機の度合いが高く、緊急の調査が必要であること、クー族とポーン族は言語的にかなり多様であることなどが分かった。ラオス北部の危機言語・少数言語の研究を行っているのは、実質的に世界で私１人である。今後もこのような危機言語・少数言語の調査・研究を続ける予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
なし。

６．研究組織
(1)研究代表者
加藤　高志（KATO Takashi）
名古屋大学・大学院国際開発研究科・准教授
研究者番号：20377766

(2)研究分担者
なし。

(3)連携研究者
なし。